
あっちとこっち 【改訂版】

ゆさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あつちとこつち 【改訂版】

【Nコード】

N3424Z

【作者名】

ゆさ

【あらすじ】

彼女の日課は、叔父夫婦が経営している旅館の手伝いをする事。ある日、時間ぎりぎりまで手伝いをしていた彼女は、遅刻から逃れらるべく自転車を全力でこいでいた。学校はすぐそこにある。

セーフだと思った束の間、彼女は森の中で迷子になっていた。

木漏れ日差すところから空を見上げれば、葉の影に隠れて何か巨大な物が飛んでいた。

あれって、飛行機だよ。そうだよ、きっと。
果てしなく広がる森を脱出するべく、ひたすら前進する彼女。

二度にわたって異世界に潜り込んだ女子高校生と、ここがお前が産まれた世界だと主張し花嫁になれと強要する竜と、その取り巻き達の話。

*警告タグは、意思表示です。

*拙作『あつちとこつち』を、三人称に改稿したものです。多少話が異なる場合もありますが、大筋は同じです。

条理と不条理と日常と

世の中不思議なことが沢山ある。星の数ほどと表現することもけれど、そもそも宇宙に点在する星の正確な数なんて知ることはいない。沢山と星の数、はたして量が多いのはどちらだろう。

沢山といえば、昨日から降り続けている雨の量も不思議だ。

雨の中、傘もささずに徒歩で、あるいは小走りで道を急ぐ。服が吸収した雨粒の水分量は、徒歩でも小走りでも、あまり変わらないそう。今をときめくアイドルグループが、とある実験番組で人工的に降らせた雨の中を、ずぶ濡れになりながらも寒さに耐えて検証していた。

くしゅん。

彼らと同じ様に震えた彼女は、くしゃみをした。冷えた指先を擦り合わせ、失った体温を取り戻そうとする。

昨日は霧雨、今日はしとしとと弱い雨が降り続けている。濡れ具合は違うはずなのに、風邪を引いてしまった。

「何を言っているの。濡れたことに変わりはないんだから、風邪を引くのも当然でしょう」

彼女は叔母の小言から逃げるように、頭から布団を被った。

不思議なことがあるように、理不尽な事も存在する。

彼女は、叔父から与えられた小遣いに窮していた。それも二ヶ月に渡っている。

必要最低限な物、例えば文房具など勉強や学校生活に必要な道具のみを購入する、そう決めてなんとか凌いでいた。

しかし、それは漸く終わりを告げた。ささやかなご褒美とばかりに、友人達とお気に入りの喫茶店に入る。メニューにあるフレーバーコーヒーの値段を見て驚愕する。この二ヶ月のあいだに、原材料費高騰などの理由で、値上げされていた事を知らなかったのだ。

涙をこぼしながらコーヒーを飲む。

そんな彼女を見た友人は笑い転げた。

彼女は高校生だ。

底抜けに明るい性格ではないけれど、交友関係は良好で、大きな問題を抱え込んだことは無い。どこにでもいる平凡な人柄、という印象が強いだろう。

両親は幼い頃に他界していて、現在は父方の叔父夫婦と生活を共にしている。その叔父が経営する旅館の手伝いをする事が、彼女の日課になっていた。

毎朝、早朝勤務の仲居と同じ時間に起床し、身支度を整えて調理場へと向かう。

宿泊客の朝食のお膳の準備をし、仲居の補助を行う。その作業が一通り終わると、自身の軽めの朝食をとってから登校する。

彼女が通う高校は、旅館からそう遠くはない。自転車登校をしていて通学路にしている道は、近所の小学校の通学路にもなっている。閑静な住宅街を抜ける道だ。

その通学路の中央をふらふらと歩く小学生に、注意を促すためベルをならす。小学生は瞬時に振り返り、うぜえうぜえ、と彼女に取っては聞くに堪えない言葉遣いを吐き、睨みつけるという洗礼を浴びせた。

「爽やかな朝なのに、どんよりしてるんじゃないわよ」

朝礼も終わり、一時限目の授業に入るまでの僅かな時間。彼女は、机に突っ伏したまま微動だにしないでいた。その姿を見た友人は、

活気の無さに呆れ果てる。

「登校中に、道で出会った小学生に蔑ろにされたそうです」

「はあ？ 小学生相手に何したの」

「自転車のベルを鳴らしただけですって」

代わりに隣りの席の女子生徒が答えた。

「それだけ？ なんて言われた？」

「さあ。そこまでは聞いてないです」

机の縁に寄りかかると、指で背中を突く。一本二本と指を増やし、5本になると脇腹をくすぐり始めた。それを見た椅子に座る女子生徒も、同じ様に反対側の脇をくすぐる。すると途端に彼女は身を振らせた。

「ひゃあ、くすぐったいっ」

「ほら、だんまり決めてないで、さっさとさっ」

「いっつ、言うからゆるしてください」

身を起こした彼女の顔は、くすぐったさを耐える為か顔が歪んでいて、愉快的表情をしている。忙しく動くそれぞれの手を上から押さえて、乱れた呼吸を整えた。

「……っ、うげえって言われたの」

「それだけ？」

「ああ、なんとなく分りました」

「それだけって、なによ。……はじめてだったの、そんなこと言われたのは」

「女将さん、言葉遣いに厳しそうですものね」

「まみちゃん！ わかってくれる!？」

「いまだき、そんなくらいでー」

理解を示した友人の言葉に、先程の暗い気持ちを振り払い、ぱつと顔を輝かせた。意見が同調して嬉しいのである。

「席に着けー、授業を始めるぞー」

「じゃ、また後で」

教師が来て、合図を送ると同時に校内放送で鐘の音が流れる。教

室内は一瞬慌しくなり、椅子を引く音や駆け込む生徒の足音で騒がしくなった。

今日も滞り事無く全ての授業が終わり、お喋りに興じる者や気が早い者は帰り支度をし、担任が来るのを待っている。

彼女が在籍するクラスの担任は寛容な性格で、連絡事項も手短かに伝えてホームルームを終わらせ、他のクラスに憚ることなく生徒を帰っていた。

「それじゃ、今日は此処までだな。掃除担当班はちゃんと掃除をしていけよ。それから、帰る者は気をつける事。この近辺でも、突如行方不明になる事件が起きている。警察に頼るような事件性は無いみたいだが、用心する事に越した事はないからな。だからといって、お前らが世話になるなよ。じゃ、気を付けて帰れ」

「はい」

生徒一同が揃って返事をする。それに満足したかのように全体を見回した教師は、教卓の上を手早く片付けると教室から出て行った。生徒達は机を教室前方に寄せる中、掃除班にあたる彼女や生徒達は箒や水を張ったバケツや雑巾を用意する。人が出て行くのを待つてから床を掃き始めた。

「ねえ、まみちゃん。行方不明事件ってなに？」

「知らないの？　ここ数日、行方不明になる人が続出しているそうなんです。二日三日経つとその人達がひよっこり現れるそうで、ただの家出だと警察が取り合ってくれないそうなのです」

「へえ」

横に並んで掃きながら、先程の教師が注意を促していた話題につ

いて問いかけた。

「新聞の地域欄に載ってますよ。ニュース番組でも、ほんの少しだけですけど放送されましたし」

「う、新聞読んでない。テレビも見てない……。ああ、これだからドラマの話に付いていけないし、流行の曲だって分らないんだあ。

録画じゃなくて、リアルタイムでみんなと話したいよ」

「ここいらの観光地はシーズンオフというものが無いから、仲居さん達も大変そうですね」

「うん、繁盛しているのは良いことなんだけどさ。宿題する時間を取るので精一杯だよ」

雑巾掛けが終わるのを待ち、がたがたと重ねた椅子と机の擦れる音をならしながら運ぶと、再び箒を動かし始めた。

「ただいまー」

「おかえりなさい。あなた、厨房の事務机の上に携帯電話を忘れたでしょう？ 今村さんが届けてくださったわよ、はい」

帰宅すると、女将である叔母が家族の夕食の準備をしている最中

だった。食卓にはおかずが盛られた皿や味噌汁茶碗が並べられていて、あとはご飯が炊き上がるのを待つばかりだ。

「あれ、そうだった。すっかり忘れてた」

「あとで、お礼を言っときなさいね」

「はい。着替えてくるね。今晚は宴会はあるの？」

「ええ。八時には終わる予定よ。宿題は？」

「ある」

「じゃあ、お布団敷くのは駄目ね。お膳下げだけお願い」

分つたと返事をして、二階にある自室に向かう。仲居見習い色の制服に着替え、髪も結上げて一まとめにする。人前に出ても恥かしくない様に薄い化粧を施して、鏡に微笑む。自分の笑顔を知ること、接客業で重要なものだそうだった。彼女はそう教わった。

階下から女将の呼ぶ声が聞こえた。

「出来たわよ」

「はい、今行く」

扉の隙間から顔だけだして返事をする。授業で出された課題を机の上に広げて、食後にやる自習の準備をした。仕事と学業を効率良くこなすために、僅かな時間も無駄にはしない。もう何年か続いている、彼女なりの時間の使い方だ。

ダイニングルームに下りると、すでに叔母は夕食を食べ始めていた。女性にしては量が多い食事は昼食と夕食を兼ねている。黙々と箸を口に運ぶ叔母の隣りに座り、いただきますと手を合わせてから、箸を取った。

「ね、美夏さんは、この辺で起きてる行方不明事件を知ってる？」

「ええ、もちろん。高校生から大学生、新社会人の若い年層中心に消えてしまう事件よね。あなたも気をつけなさいね。といっても、ほんとうに突如として起こる様だから、気を付けようが無いみたいだけ」

「私、今日はじめて知った」

「ああ、そうね。新聞を読む時間もないものねえ。航平さんに言っ

て、時間を十分くらい減らしましょうか」

「え、いいよつ。みんなに迷惑かけちゃう。お膳だつて一気に運べないし」

「それくらい、どうにでもなるわよ。カートだつてあるんだし」

彼女の朝食準備を手伝う姿は、旅館のちよつとした名物にもなっている。重ねたお膳を片手で持ち上げ、上手くバランスを取りながら調理場から大部屋まで運ぶのだ。それを見かけた散歩帰りの宿泊客に拍手をもらうくらいだ。

「それじゃあ、先に行くわね。宿題はちゃんと終わらせるように。食器洗いお願いね」

「うん、いつてらっしゃい」

食事を中断して席を立つ。女将を見送る為に、玄関までついていった。

自転車と迷いの森

物好きなお客様もいるんだな、と彼女は感慨深げに悩んでいた。大道芸さながらにお膳を運ぶ仲居がいる。

そういう噂を聞きつけたある一組の宿泊客は、遠路はるばる飛行機に乗ってかけつけたという。

朝食準備の時間に起きることが出来なく見逃してしまったから、お膳を下げる様子を見たいと懇願された。

如何したものと叔父夫婦に判断を仰ぎ、お客様を満足させなければならぬ、との結論に達する。要望通りに高く積み重ねたお膳を持ち上げ、廊下を歩くところを見せた。客はたいそう喜び褒めもしてくれたが、彼女が学校に遅刻するという事実は逃れようもない。そして、なりふり構わず鬼の様な形相で、ペダルを全力で回している。

通いなれた道の、風景を見る余裕なんて今の彼女には無い。遅刻しないようにするだけで精一杯だ。

そうして、周囲に注意を払っていなかった彼女は、緩やかなカーブを曲がりきった所で道に迷ってしまった。

なんで、どうして。直線道路に続いたカーブを走り抜けていたのに。

その日、彼女の日常は、音を立てながら崩れていった。

「うおー、ここは何処かな」

毎日通っていた町並みが消え、現れたのはぽっかりと口を開けた、薄暗い獣道だった。

一目では獣道にみえるが、野生動物が通る獣道でない事は簡単に伺い知れる。雑草が地面を覆い隠してはいるが、熱帯雨林で見られるような灌木の類は全くない。花も無ければ、果実を実らせそうな植物も自生していない。

唯一あるのは、彼女の身長をはるかに凌ぐ巨木だけだった。

「森、よね」

自転車から降りて、地に立つ。天に向かって生える巨木を見上げ、彼女は首を傾げた。

「この木、何メートルあるのかな。十メートル？ 高層ビルぐらい？」

枝も葉も見えず、空さえも見えない。枯れ木も落ちてないから、火を熾そうにも最適な枯れ枝を集められそうにもない。サバイバル生活をするには不向きな森だ。それでも彼女は、自分自身を見失わずに冷静さを保っていた。

「ほんととすつごい驚いているんだけど、やっぱり訓練の賜物よね。ええと、こつちから来たから、後を振り返ったら、いつもの町並みがあるんだわ」

自転車のハンドルを巡らせ、旅館があると思われる通ってきた道に向けた。その間は、小さく湧き上がった恐怖心に耐えるように目を閉じていた。

今は通勤通学の時間帯だ。この目を開いたらきつと、すれ違った会社員の後姿やランドセルを背負った小学生を見ることが出来るだろう。

祈りを終えたときの様に、ゆっくりと目蓋をあげた。

目に映りこんだ風景は、巨木の群れだけであった。

「困った、どうしよう」

再びハンドルを回し、今度は学校があるであろう方向に戻した。

この森には人の気配が感じられず、物音一つも立たない。唯一あるのは、自分自身から発せられる衣擦れなど、微かな音だけである。

音の無い状態は、彼女にとって悩むべき事柄へと変化する。

スタンドで固定した自転車に跨り、サドルに腰を落ち着ける。ペダルを何回も踏みしめて、後輪を空回りさせた。今はこの音一つさえ、彼女には必要なもの。

客商売というものに携わり、常に客や従業員に囲まれ賑やかな生活を送っている彼女には、この静けさが不気味に感じられる。耐え難いものであった。

「あー、無音って駄目だ！ よく気が狂うって言うけど、その前にもう駄目だよ。音、音が欲しいっ。あとちょっと肌寒いから、あったかい所も！」

ハンドルに肘をついて凭れかかっていた彼女は、一際大きく叫ぶと猛然とペダルをこぐ。車体に負荷がかかり、左右に揺れた。

「ここにもいってしまうが、学校があるかも知れない方向に進もうかな。そうしよう、そうしよう」

一旦自転車から降りて、スタンドの固定を外そうとした時だった。何気なく見つめた雑草の影に、溝の様な線状の跡があるのが目に入った。しゃがみこんで、指先で草を払う。

「これって、もしかして轍？ ってことは車輪のついた乗り物がある。じゃあ、それなりに発展した文化や技術があるのね！」

芽吹いた希望に心を躍らせた彼女は、すっと勢い良く立ち上がった。辺りを見回した。

「この轍は、村と村を繋いでいるのね。辿っていけば人に出会えるはず。よし、このまま真直ぐ進もう！」

出発点の目印として、足の爪先で地面に大きなバツ印を描く。鞆の中から文具用のカッターを取り出し、近場の木にもバツ印を刻んだ。

気を取り直して、自転車に乗りペダルを押し進ませた。

寂しさと不気味な静けさを払拭しようと、歌を歌う。

この轍がどこまで続くのか分らないため、本来ならば体力温存のために無言で進むべきだ。それは彼女も理解している。しかし、押寄せる孤独には耐えられなかったようだ。

明るい曲調のものを選んでは、わざと音階をはずして歌い、自身を盛り上げようと躍りになっていた。

似たような景色が続くなか、どのくらいの距離を進めたのか予測もつかなかったが、目の前に一筋の木漏れ日が降り注いでいるのを見つけた。

自転車から降りて僅かな距離を歩き、その中央に進む。頭上を仰げば、木々の葉の間から空と太陽を臨むことができた。

「太陽だっ。そういえば、普通に呼吸も出来るから、酸素はあるってことね。ある程度は生き延びられる」

少しでも太陽の光で暖をとりたくなつた彼女は、制服に土がつくのも構わずに寝転んだ。

伝え合う音

はるか遠くから、木々がざわめく音が聞こえる。

強風が吹いたのか、葉が揺れ動いては、僅かに差し込む陽の光を乱す。

心地良さに身をゆだねて夢の世界を漂っていた彼女は、日差しが当たらなくなったことに不満を持った。日が傾いたのかもしれない。そう考えて、わずかに場所を移そうと目蓋をあげる。

太く高く生える樹木の先、茂る葉の隙間に巨大な影が見え隠れし、ぼやけた視界を横切っていった。

「ひこうき？」

あれは空を飛んでいる。

空を飛ぶものといえば、飛行機かヘリコプターしか思い浮かばない。

垣間見た物体は、胴体の横幅が広く縦にも長かった。飛行機の形と一致しない事もない。

そうだ、あれは飛行機だ。自分が進んでいる方向に飛んでいたからには、この先に村があるのだ。

淡い期待が、確信に変わる。

「村じゃないのかも。飛行機が着陸できるんだから、人が大勢いて商業施設もある大きな街ね」

すぐさま自転車に乗り、移動しようとペダルに足を掛けたところで、ある事に気付く。

「飛行機らしきものがあるのに、陸地の移動は馬車？ 変なの。自動車とかはないのかしら」

呟いた疑問は宙へと消えていった。答えを持つ人間が、何処にもいない。

そして、彼女はまた静寂に包まれたことに気付く。何よりも苦手としているものが、この森には溢れていた。

「人の声、聞きたい」

独りになったことがない彼女は、人を欲した。生活音の類が一切無い事が、苦痛になりつつあった。

飢えから逃げるように自転車に飛び乗る。

この世界に、自転車という物はとてもありがたい存在だと彼女は感じた。こういう形で、自転車に頼るなど思いもよらなかった。

チエーンが回転する音。

タイヤと地面が擦れて起きる音。

ベルが鳴らせる事。

風を切る音。

全て、自転車に乗れる事によって、感じたり聞くことができる。

もっとそれらの音を耳に入れたくて、轍のある道から外れ、木の根など小さな隆起が場所に方向転換しようとした時だった。

彼女の耳が、小さな金属音を拾う。微かに聞こえるそれは掠れた様な甲高い音で、徐々に大きくなって聞こえた。距離を縮めているようである。

音を求めてはいたが、その異質な金属音に、悪いほうへと勘が働く。身の危険を察知して、今しがた動かしたハンドルの先へと急ぎ進み、一際大きな木の陰に身を寄せた。

息を潜めて、訪れるものをじっと待つ。

乱雑に生える巨木の合い間を縫うようにして現れたのは、キャタピラ付の電車の様な乗り物らしき物だった。

電車と呼んで良いのかも怪しい。

正確にいうのなら、荷物を運ぶコンテナだろうか。車体の側面に窓は無く、中の様子は窺えない。しかし両端には運転席なのか扉と小窓があつて、個室が備え付けられていると分る。その車体を囲むように、鋭い突起物が連なった帯状の半透明の物体が、くるくると回転している。

車輪はタイヤではない。一風変わったもので、コンテナに合わせ
て長く、幅は細いようにも見える。車高が高い分、キャタピラもま
た丈のある造りだ。ちよつと触っただけでも崩れ落ちそうで、頼り
無ささを感じさせる。

総じてものものしい戦車の様なそれは、次第に減速し、木漏れ日
の注ぐ場所に停車した。

甲高い音も止み、同時に空気が抜ける音がした。

その様子から、しばらく此処に留まるという事が知れる。証拠と
ばかりに扉が開き、二人の人間が梯子を使い地面に降り立った。も
う一人の姿も確認できたが、降りてくる気配はない。高台からの監
視だろうか。

木の陰から顔を覗かせて様子を窺っていた彼女は、どうしようも
なくその場にしゃがんだ。

ただ、自分を見逃して、去ってくれる事だけを祈る。

「居る様子があるか？」

「分らない。騎車の音に驚いて逃げたのかも」

「そうだとしても、移動手段は徒歩しかない。そう遠くへは行けな
いだろう。殿下は、倒れていたと仰られていたし、身体の調子が悪
いのかもしれん」

「ああ。この辺を重点的に探そう。上からの見張りは頼んだぞ」

「了解」

三人の会話が聞こえる。

内容は理解できた。日本語に近い言語で、中には聞き慣れない
単語もあったが、自分を探しに来たという事だけでも分れば良いほ
うだろう。

問題は、この状況を如何にして切り抜けるか、だ。切り抜けれ
たとしても、帰る方法が分らない。八方塞だ。

ふと彼女は、自身の腹に手をあてた。切迫しているのに、空腹を
感じたからだ。にわかに別の問題が浮上する。今は、どんなに小さ

い音でも隠したい。

ほんの数分前に求めていたものが、問題の種になるとは考えてもいなかった。

今すぐ帰りたい気持ちで、彼女の心は埋め尽くされているのに、動く事も移動する事も出来ない。

草を踏みしめる音が一步、また一步と近づいている。

あと何歩で見つかってしまうのだろう、身を固くし全身を強張らせる。その時だった。

自転車の籠に無造作に放り込まれた通学鞆から、可愛らしい電子音が漏れ聞こえる。徐々に大きくなる音量に、隠れているのを忘れ慌しく鞆を取り出し胸に抱く。鳴り止まない携帯電話の呼び出し音に、彼女の思考は停止した。

残された者の葛藤

「あ、丁度いいところに。いま代わります、少々お待ちください」
朝の一仕事を終えて、今日の予定を再確認しようとする事務所に戻ってきた女将は、電話応対に出ていた副支配人に呼び止められた。

「女将さん、お嬢さんの学校の先生からお電話です」

保留音に切り替えた副支配人は、癖なのか雑音が入らないようにと手で塞いだ受話器を差し出す。

「学校の先生？ 用件は聞きましたか」

「ええ。お嬢さんが登校していないそうです」

「なんですって？」

にこやかな表情を一変させ、統率者としての凜とした顔つきになった女将は、副支配人に目配せして礼を告げると電話にでた。

「もしもし。お待たせいたしました、樋口でございます」

『お忙しいところ失礼致します』

「いいえ、とんでもない。うちの子が登校していないと聞きました
が」

『ええ。今日は欠席ではないのですか？ 先日から風邪を拗らせて
いたようですし』

「いいえ、風邪はとづくに治りましたよ。今日はお客様からのご要望
がありまして、出るのが遅くなってしまいましたけれど、確かに
そちらに向かいました』

『そうですか……。携帯電話にも掛けてみたのですが、呼び出し
になるときに電波が無いとアナウンスが入ると半々なんですよね。
もしかしたらまだお家に居るのかなと思ひまして』

「まあ……。お手数掛けまして申し訳御座いません。旅館内には居
りませんので、一度家に帰って確認します。見つけ次第締めなおし

て、折り返しお電話差し上げます」

『し、しめ……?』

「ああ、いえ。なんでも御座いませんわ」

『そ、そうですか……』

「ええ」

『では、宜しく願いたします』

「いいえ、こちらこそお手を煩わせてしまいまして、申し訳御座いません」

電話を切った女将は受話器を戻すと、自分専用の机の引き出しから携帯電話を取り出す。折りたたみ式のそれを開き、二度三度と指を動かすと耳に充てた。

（家出するような子ではないのにな、なにか悩みを抱え込んでたのかな。この場に総支配人がいなくて、助かった。普段の手厳しさには慣れたけど、お嬢さんに対するアレはなかなか慣れん）

漏れ聞こえる音声と女将のやり取りを、聞くとはなしに聞いていた副支配人は、命あつての物種と心の底から思い、彼らの義理の娘に合掌する。

愛情を持って接しているのは解るが、いくら身内の子といえど度が過ぎていやしないかと思う事が多々ある。厳しすぎるその態度は、しかして、当事者はいつもあっけらかんとしている。彼女も、自分と同じく慣れてしまったのか。いや、やはりそれだけは慣れないが。

「もしもし、秋君。お久しぶりね、元気？ ええ、元気だと思わよ、連絡も無しに行方不明になるくらいは。なにか心当たりはなかしら。……そう、秋君も知らないのね。……ええ、お願いするわ。では、また」

（お嬢さん、逃げてー。いや、おとなしく発見されてください、従業員の為にも！）

女将は心当たりのある電話番号にかけ終わると、副支配人に向き直り声を掛けた。

「副支配人」

「はい」

「喉の調子でも悪い？　こんな仕事だから休む暇もないだろうけど、無理はしないでね」

「いえいえ、とんでもありません。……何か用件でも？」

書き物がある振りをして椅子に座っていた副支配人は、恐る恐る半身を捻り女将を見上げた。

「ちよつと家に戻ります。そんなに時間は掛けないけど、その間の事は宜しくお願いするわ」

「はい、分かりました」

「それから、あの子からの連絡があったら、すぐに私にも知らせてちょうだい」

「承知いたしました」

「それじゃあ、またあとで。……うふふ、お仕置きは何がいいかしら？　とりあえずは、いかがわしい本の如く隠し持っているクツキーは没収しなくちゃね。太らない体質は羨ましいけれど、ご近所さんのコンビニをはしごしてまで大人買いするから、二ヶ月もお小遣いに困るのよ。原因は根こそぎ断つべきよね。それから、航平さんにもつちり扱ってもらわないと」

従業員用の出入り口に急ぐ女将の足取りは、心なしか小躍りしているように楽しげに弾んでいる。

年頃の娘と従業員、どちらもこの旅館のために良く働き尽くしていてくれる。

ただ、と副支配人は、自分の半生を振り返る。自分の両親は甘い性格だろう。それにつけこみ悪さもしたし、反抗期は暴れるだけ暴

れた。それに比べれば、支配人家族は厳格すぎるかもしれないが、義理の娘は曲がることなく品行方正に育っている。そんな彼女が家出をするなんて信じがたい話だが、そういう感情が芽生えても、なら不思議ではない年頃だ。

だからといって彼女を擁護した日には、館内は吹雪が吹き荒れるだろう。それも二倍だ。

留守を任された男は、頭を悩ませる。眉間に皺が寄り、苦渋に満ちた眼で女將を見送って、深いため息をついた。

館内を良好に保つのも自分の仕事だと、自分自身に言い聞かせる事にした。

夢も希望も

それは何の先触れも無く起こった。

否、予兆はあった、とすべきだろうか。

そういう事象が頻発しているという知らせは自分の元にも届いていたし、懇意にしている組織からも調査依頼を受けている。

同業の知人にも、その依頼が舞い込んだはずだ。

彼は、彼女の師匠でもある。己が動く事もあれば、彼女に仕事を回す事もある。けれども、二人で一つの仕事を請け負う事は少ないらしい。

「一通り教わったんだけど、小父上の頭の中に、協力とか共同作業ってという言葉が無いみたいなの」

彼女は弟子入りしてから一年後、そう漏らした記憶がある。単独行動に不満があるわけではないようだったが、それまでの生活と比べ物にならない程には、独りでいる事が増えたのだと感じ取った。

「でも、それで誰かを……。ううん、仕事を成功させる事が出来るのよね」

おこがましい思考は捨てる。

幻想を抱いているのなら、今すぐ失せる。代わりなんて、いくらでもいる。

「ねえ秋君？ 約束って、片方がいなくなったらどうなるの、誰かが引き継ぐの？ 好きでもないのに？」

彼女は、最初こそは泣いて縋りついてきたが、次第に寄り付かなくなかった。仕事人としては、良い方向に歩き出している。

けれど、そんな些細な成長が、こんなにも遠い存在になるなんて、知りもしなかった。

今回の件について知人は、該当地域に住む彼女に任せるだろう、

そう考えていた。

しかし、当の本人が行方不明になるとは、誰が予測できたのか。登校途中に忽然と消えてしまったらしい。

「さあ、どうしましょうか」

彼女の育ての親からの連絡で知りえた事実を、さほど困った様子を見せずに呟く。

婚約者だからといって、何でも知っているわけではない。連絡をもらっても、現場にいない自分にはどうにもできない。差し当たり、このまま授業に出席することぐらいしか良案が思い浮かばないでいる。

彼も高校生であって、学生の本分は勉学にある、という思考の持ち主だ。生業の仕事は、休日に主体をおいて活動している。

依頼の事もあるから、一度は出向かなければならないが、そこに私情をはさむつもりは毛頭にも無い。調査内容に、彼女の失踪まで含まれていない事もあるのだが。

「電話を掛け続けることぐらいしかできる事がありませんね。樋口夫妻には申し訳ないですが」

あの夫婦は、普段の物静かな態度から想像出来ないほどに、なかなか過激な性格だ。

いくら部屋代を無料にするといわれても、あの旅館だけには泊まりたくない。仲居や料理人達総出で、ちくりちくりと嫌がらせを受けるのだ。一瞬たりとも心が休まらない。ビジネスホテルで充分事足りる。

「違約金を払ってキャンセルしたほうが、まだましというもの。…
…そうですね、それも良いかも」

なんと言われようが、彼女も自分も婚約を覆す気はない。

例え婚約当初から愛がなくても、その愛が更に遠ざかろうと、二人の行く末にに夢や希望がなくても、彼女は自分のもの。

そう、すでに自分の『もの』なのだから。

道行く先

身を護れそうな物は何一つ持っていなく、武器となりそうな物も無い。

文具カッターを握ろうかとも考えたが、所詮は文房具。筆箱に入るようにと作られたそれは細身で、力任せに斬りつけても皮膚の表面しか傷つけられないだろう。もしかしたら刃が折れて、自分に向かって刃先が飛んでくるかもしれない。これは無しだと、瞬時に判断する。

視線を彷徨わせて、自転車を見つめた。丸ごと投げれば、あるいは胴体に当たり一瞬でも呼吸を乱すことが出来るかもしれない。しかし、一度投げたら、二投目の投擲動作が難しいような気もする。それに、これは移動手段だ。どこかがひしゃげて使い物にならなくなったらとても困る。これも、無しだ。

いくつか手段を講じた彼女は、どれも違つと小さく頭を振ると、ふと自身の手が握りしめてある通学鞆に目を留めた。

「……かばん」

彼女はおもむろに腕を振り始めると、勢いを付けて鞆を放り投げた。

「花嫁の気配を感じたんだ。馬車を見せてくれないかな」

森に竜人の気配を感じた、と興奮気味のシルヴェストが騎士団の詰所に駆け込んだ。

馬車といっても正確には荷台を指すのだが、それを保管してある倉の扉を開けるよう命じる。王城で使われる馬車や馬の世話は騎士団が管理を担当しており、新米騎士や従者が厩舎の世話を任されていた。

新米騎士を探す事がもどかしい様子をあらわに、手近な所にいる騎士をつかまえてはシルヴェストはまくし立てた。

竜人が産まれるという森は、竜族が神聖なる地と重要視している場所で、簡単には足を踏み入れる事ができない。永き時を生き、聡明さと博識をそなえ持つといわれる竜族でさえも、解呪することが出来ないという結界が敷かれていた。

唯一の移動手段が、馬車である。

荷台は、産まれた竜人によって形状が異なるとされている。農村に多く見られる幌付であったり、またある時は豪華な装飾の屋根付きのものであったりと様々な記録が残されている。これに馬をつなげて走らせるのだが、やはり結界と同様に魔法が施されており、なぜ形が変わるのかという部分は解明されていない。

これは森そのものにもいえることで、生える樹木も竜人によって違つと、記されている。事実、森は数年前から徐々に鬱蒼と生い茂

る薄暗い森へと変貌し、光も届かない不気味な森へと成長を遂げていた。

いつどのようにな、この仕組みが出来上がったのかも明らかにされていない、不思議な森と荷台。

突然に王族に呼び止められた新米騎士は、請われるがままに鍵束を持ち出し、シルヴェストを倉まで案内した。途中何処かで置き去られたのか、侍従たちが足早に近づいてきた。その息は荒く、忙しくなく浅い呼吸を繰り返している。

大きな扉を数人掛かりで押し開き、荷台を確認しようと倉の中に入る。

異様な光景に、居合わせた誰もが息をのむ。

明り取りと換気のために設けられた窓から差し込む光が、薄暗く埃臭い倉の中を照らしている。

光を受けて鈍色に輝く金属の塊が、訪れを拒むかのように鎮座していた。

「これは馬車なのか……」

「異様な」

「馬を……。馬に、これを引かせるのか」

「殿下、このような形では……」

騎士も侍従も、初めて見る荷台と思わしきそれに、呆然とするばかりで言葉を紡ぎ出せずに立ち尽くす。

その中で、シルヴェスト只一人は、臆する事もなく荷台に手のひらを這わす。

「ああ、これが、君の世界……。馬車なんだね。全部隠してしまっているなんて、恥しがり屋なんだね、きっと。それとも秘密が多いのかな、君は」

熱に浮かされたような眼差しで荷台を見つめては、優しく撫でながら話しかけているシルヴェストは、具合が悪いのか急に咳き込みはじめ、膝から崩れ落ちて倒れた。

「殿下!?!」

「如何なさいましたか」

侍従は駆け寄って半身を抱き起こす。意識を失ったのか、頬を軽く叩いても揺さぶっても反応を返す事はない。

彼に同行してきた侍従達は、二言三言言葉を交わしてシルヴェストを部屋に連れ戻す事に決めた。このままでは移動できないからと、騎士に担架の準備を依頼する。

騎士は慌てて倉を飛び出し、数分後には担架と数人の騎士を連れて戻ってきた。

その日感じた竜人の気配は、日が暮れる前には消え去った、らしい。

それからというもの、喜びから突き落とされた殿下は、すっかり気落ちしてしまって自室で塞ぎこんでいるようであった。散歩はあるか、公務も欠席を続けているらしい。詳しくは知らないが、部屋の警護にあたっている騎士の報告だから、間違いは無いだらう。

そんな噂を聞いた同僚の騎士達は非番になると何度も倉を訪れ、その扱い方を知ろうと手当たり次第に触り始める。

巨体を目の当たりにして、息を呑んだ。

「ネルソンじゃないか。どうかしたのか」

「俺、今日が初めてでさ」

「うん？ そういえば、夜回りだったか。まあ、頼むよ。お前が一番操舵術に優れている」

操舵術と聞いて、ネルソンは首を傾げた。

「船なのか、これ」

「違う、馬に引かせる物でもないがな。いろいろ見たんだが、ほらあそこの小窓があるだらう。あの中が舵取りする場所になっているみたいなんだ」

指し示された部分は、継ぎ接ぎで出来た扉のようで取っ手らしき

ものが付いている。小窓もあつて、中が見通せるようだ。

「あの小窓な、硝子が埋め込まれているんだぜ」

「え？」

「凄い透明度だよな。あんな薄気味悪い森に、この荷台。随分と変わり者の姫君だよ」

頼むぜと肩を叩くと、ネルソンから離れていく。その後姿を見送りながら、彼は呟いた。

「森って、陸地にあるものだよな。舵はいらないよな……」

数日後。

シルヴェストが竜人の気配を感じる度に、荷台がひとりでに動作する事が解った。

突然に光りだしたり、地を削るような音を発したり、舵取り室にある目盛りの矢印が振り切れたり、荒事に慣れているはずの騎士達でも怯える者が続出した。

さらに数日経ち。

ようやく操舵方法を習得したネルソンは、視界が悪い森を、得意の操舵術で荷台を進める。

馬は必要なく、単独で動く事が解ると、騎士団はその技術を盗み取ろうと躍起になっていた。何度も練習すると実際に森の中を走らせて、見た目に反して快適な乗り心地を味わった。

そんな事を思い出しながら、待機を命じられて操舵室に居残る。

待ちわびている殿下に、一刻でもはやく竜人を連れ帰らなければ、ネルソンの思いとは裏腹に、突然飛んできた物で倒された同僚と、変わり者と評判の黒髪の竜人の娘を目にして、自身も抗う術もなくして倒された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3424z/>

あっちとこっち 【改訂版】

2012年1月2日11時49分発行